市長からのメッセージ

広く深く知ることの大切さ

大和郡山市長
上田　清

新成人のみなさま、おめでとうございます!

さて、その境目がどこにあるのかはともかく、大人になるということは、ものごとをより広く、より深く知ることの大切さに気づく、あるいはその気づきのきっかけとなるできごとや人に出会う機会が少しずつ増えていくということではないか、自分自身のことを振り返りながら、そんなことを考えているところです。

たとえば、ふだん何気なく食べているハンバーガー。

最近、話題になっているのは、1個のハンバーガーをつくるのにどれだけの水が必要か、という問いかけです。

おわかりでしょうか。

考え方はこうです。ハンバーガー1個をつくるのに必要な原材料のパン(小麦)、レタス、トマト、牛肉が生産される過程で使われた水を足せばどうなるか。

正解は何と2400㍑!学者によっては3000㍑という計算もありますが、仮に賞味期限が過ぎたからといって、ハンバーガー1個を捨てることは浴槽10数杯分の水を捨てることになる!というのです。

もちろん食材だけではなく、お金や電力、火力も必要ですし、何よりもさまざまな人の手を経てようやくハンバーガーは消費者の口にたどり着くということを考えれば、たかがハンバーガーといえども、あだやおろそかにすることなどできないのではないでしょうか。

私たちは決して一人で生きているのではありません。

ものごとをより広く、より深く知ることは、人と人とのつながりや「おかげさま」のありがたさを知るうえで、とても大切なことだと思います。

みなさまのご活躍を心から期待しています。

Human rights message to a new adult

新成人からのメッセージ

「和」を大切に

乾(いぬい)　美優(みゆ) 郡山西中学校出身

私たちは今年、20歳という節目を迎えます。今まで家族や周りの人達に守られてきた立場から、社会で「大人」と呼ばれ、その社会を担う立場に変わります。その為、より一層自分の行動や発言に責任を持たなければなりません。私自身自覚ある行動をし、一人前の大人として生きていく覚悟でいます。

私は今まで、家族や友人、周りの方々のやさしさやあたたかい心を受け、沢山の支援があってここまで成長することができました。特に、自分の行きたい大学に入学し、そこで自分のやりたいことをさせてくれた家族には、本当に感謝しています。現在はかねてからの夢であるメディア業界への就職を目指し、日々学業に励んでいます。私の周りには、夢を持ち、それを叶えるために努力を惜しまず頑張っている人達が沢山います。また、大学生活では自分と違った生き方や新しい価値観に出会うこともたくさんあります。それらからの刺激をもらいながら、自分の生き方や考えをしっかりと持ち、夢を実現させたいと強く思います。大学を卒業し、これから社会に出ていくにあたり、人との「和」を大切にできる人間でありたいと思います。20年間、多くの愛をくださった皆様に感謝し、次は自分がそれを周りの人達に与えられるように、一歩一歩精進していきたいと思います。

新成人からのメッセージ

20歳の思い

栗正(くりまさ)　克幸(かつゆき) 郡山南中学校出身

今年、私たちはいよいよ「成人」になります。私たちは、もう既に職業に従事していたり、また学問を究めたりしていて、様々な立場で活躍しています。そのうえで、私は夢を追いつつ、私自身の使命を自覚し、また責任を果たそうと思います。

まず、今までの人生を振り返ると、家族や友人などたくさんの人々に支えられていました。そして、そのなかで入試や部活の試合など様々な試練を乗り越え、今の私があると思っています。具体的には、大学入試のとき、成績が伸びず思い悩んでいた中、たくさんの友人や先生方などに助けられ、なんとか今の大学に合格することができました。

さて、その中で私は化学分野における高度技術者を目指して、仲間と切磋琢磨しながら頑張っています。しかし、この分野では危険物を扱うため、取り扱いには厳重な注意を要します。さらに、そこで開発する製品が、ときには人々に害を与える可能性もあります。「成人」となった今、このような影響に対してより一層責任を持って取り組む必要があります。これはどの分野でも言えることだと思います。

また、既に選挙権を有し、たった一票といえども、世間に影響を与える存在でもあります。そのためにも、世の中のことに無関心ではいられません。またこれから活躍していくためにも、お互いがお互いのために、何があるとうれしいか、何があると便利か、それを実現するために何ができて、何をしなければならないか、一度考えてみても良いと思います。私は、これまで私を成長させてくれた人すべてに感謝し、自身の使命と責任も自覚して、夢を追い続ける決意です。

〈平成31年 新成人の集い「成人式」新成人スタッフ〉

メッセージ

今、見えないだけ

第6回水木十五堂賞受賞者
近世麻布研究所所長
吉田 真一郎

成人の日、小さな月桂樹を庭へ植えたのを、この間のことのように思い出す。その頃私は、大学で外国語を学びながら、夜間は絵の教室へ通っていた。そのうち会社へ勤め、家庭を持つのだろうと考えていた。しかし、絵にのめり込み過ぎて身体を壊し、救急車で病院へ運ばれ、医師からは「こんな生活を続けるのなら命の保証はない」と脅された。死にたくはなかったので、生活の改善を試みたが、それまで考えたこともなかった命を強く意識した毎日は、逆に、絵を描く方向へと自分を追い立てた。ますます無茶な生活になっていき、学校も行けなくなってやめた。描く絵は次第にそれまでの具象から、白い絵具だけの抽象的なものになっていた。26才の頃、海外の作品を自分の眼で確かめたくなり、日本を出た。最初に着いたドイツで、1人の美術家と出会った。私の描いた白の作品を見せると、彼は、私と日本および東アジアのルーツに関する質問を投げかけてきた。それらはどれも、私の絵とはあまり関係のないことのように思えた。ただ次第に、自分があまりにも日本のこと、周辺国の歴史を知らないことのほうが気になりだし、計画していた先の国へも行かず帰国してしまった。それ以降、白の絵は描けなくなってしまった。30才を過ぎた頃、キャンバス代わりに使おうと、日本で古来伝承されてきた衣料原料を求めて、各地を訪ね歩いていた。作品にとりかかる前に、顕微鏡で繊維を調べていると、いろんな植物を使って糸にしていることを知るようになった。そんな折、私の調査と収集物に興味をもったサンフランシスコの民俗美術館から声掛けがあり、日本の衣料素材を基にした展示を行うことになった。以降、頼まれては各地の博物館で、繊維の研究発表をするようになり、絵とはずいぶん関係のないことに時間を割くようになった。昨年、若い頃に私がドイツで出会った例の美術家に関するドキュメント映画『Soul Odyssey – ユーラシアを探して』を撮った監督が訪ねてきて、一緒にその映画を観ることになった。鑑賞後、映画館を出ながら余韻に浸っていると、ふと、自分がその美術家よりも年をとってしまったことに気づいた。と、同時に数日前、山口のYCAM(ワイカム)というアートセンターから、私の白の作品を展示しないかという企画を持ち込まれていたことを思い出した。なにか不思議な糸でつながっているような気になり、やることを決めた。展示では、白く晒された江戸時代からの大麻布だけを用いて作品を構成した。展示を終えた日、これまでいくらやっても表現できなかった「気配」の存在を確かに感じた。私が求めていたものがそこにはあった。20代の頃から今日に至るまで、決して怠ることなく、続けてきたデッサンや絵は、一体なんだったのか。自分にとっては専門でもなんでもない布の研究が、作品制作の延長線上にあったなど考えもしなかった。あなたたちの中でも、普段、興味を持ってやっていることと、生活していくためにやっていることが一致していない人が多くいるかもしれない。しかしそれは今見えないだけで、もしかすると、日々の中には、やがて形になるためのものが、あふれているのです。

吉田真一郎氏は、江戸時代から近現代まで実際に日本人が着用していた自然布を蒐集し、産地を示す印や繊維に関する膨大な調査を行い、日本の繊維研究において高い評価を受け、その成果は社会的にも貢献されております。